

目的 赤瓦にシーサーという沖縄独自の風物詩も、歳月とともに鉄筋住宅にと変化し、琉装姿も今では七、八十才の高令者のみ着用され、人々の日常着は洋服となり、晴着はもっぱら和装に魅力を感じる傾向である。現在仕立てられる琉装は老人から譲られる事を考へ、和装への仕立て変えを考慮した裁断が多い。

琉装は和装と類似点をもちながらも一種独特の着装美をかもし出している。その美しさは、文献によると、能衣裳や中世小袷等の着流し姿との関連性を多く論じられている。しかし、いつ頃、どの様な推移によって発展したか詳かではない。琉装への関心のうすらぎつゝある昨今、和装との関係を究明し、正確な調査研究が必要である。

方法 『衣生活研究』ノタク5年2月号所載の“クンジについて”の論及を基礎とし、更にこれに検討を加え、沖縄県立博物館、琉装所蔵品、その他の実物資料、古老よりの圖書と調査を根拠として、主にその形態上、着装上、縫製上より考察を加え、内地の能衣裳、中世の衣裳との比較検討しようとして試みた。

結果 一見類似点が多く見られる能衣裳の着用目的はいうまでもなく舞台衣裳である。したがってその着装法も異なり、又、発生も13世紀前後にさかのぼる。しかし琉装の場合はそれ以前に用いられた広袖系衣服に深い関係があり、沖縄の風土、文化によく融合し、独自の衣服を作りあげたと思われる。しかし、最近の琉装には小袖の変遷による影響が深く感じられる。